

# 文化の政治性——天皇と中世文化をめぐる——

城西国際大学教授 脇田晴子

脇田晴子でございます。よろしくお願いします。

我々は文科系の人間ですので、文化を非常に大事に思っているわけです。しかしどうも理科系の方は、文化とは人間を豊かにするゆとりのようなものだと思います。例えば非常に印象に残っていますのは、理科系の人が「電気ストープや石油ストープに対して、薪で焚く暖炉は手間はかかるけれどゆとりがある。文化というものはそういうものだ」とおっしゃったので、私は「文化とはそんなほんわかとしたものだけではありませんよ。文化というのは思想で人心を操作できるのだから、恐ろしいもので、毒のあるものでもあるのですよ」といったらみんなしらけてしまって困ったことがあります。

47 (脇田)

日本が敗戦を迎えたのは、私が小学校六年生のときでした。縁故疎開をしておりますが、玉音放送を聞きましたが、何のことかさっぱりわかりませんでした。天皇の声が非常に黄色かったのでびっくりしたのが一番の感想でした。その後、小学校へ行ったら先生の言動が一日にして変わりました。一日にしてというのは大げさかもしれませんが、今まで先生がいつてらしたことが一週間か十日のうちにどんどん変わって、民主主義を説かれることに非常に

ショックを受けました。私の父は厭戦気味でしたが、一番上の兄は兵隊にとられて、相当、軍国主義で、戦争中も父といろいろと喧嘩をしておりました。だから私はあまりショックは受けないで、「お父さんの方が正しかったのだな」と思いました。そのような経験が尾を引いて後に歴史学へ行くことになったと思います。

歴史をやるようになってつくづく思いますのは、文化や思想が人心を左右でき、操作できるということです。だから恐ろしいものだと思うわけです。もうあの戦争中のように刷り込まれたくないのです。自分の心に刷り込まれていって、自分でもそれがわからないというのは、やはりそれは文化のもう一つの効果だと思っわけです。要するに人間が思想操作の中で戦争の時のように自ら死地に飛び込んでいくのは、私は文化とか思想のせいであろうと考えております。今日は「能楽」などを例にとつて「天皇と中世文化」の話をいたしますが、今後はそれだけではなくて、プラスもマイナスも含めて、文化の社会的効用を考えていきたいと思っております。私は「被差別民」や「女性史」の研究をやってきましたけれども、例えば女性の婦徳というものは文化の効用として女にも刷り込まれていろいろな作用がありますが、そのようなことを研究していきたいと思っわけです。

そこで『天皇と中世文化』という本を去年書いたわけですが、それは十何年前に書いた論文を元にして書いたわけです。戦後の歴史学では「天皇の無力さ」が強調されてきました。しかしそうすると天皇が「万世一系」といいますが、いろいろな継承・交代があるという説はありますし、「血族主義」というよりも「家主義」で養子を取るから、ずうっと存続するわけです。そのようなものもありますが、とにかく「天皇制」は日本とエチオピアにしかなかったのですが（今ではエチオピアの皇帝はなくなっていますが）、それが存続していく理由・原因は無力を強調しているとわかりません。そうすると逆に、その意図とは別に「神秘性」とか、神道などの「宗教性」とかに原因を求めていくということになるわけです。私は平安時代の延喜式以降でいうと天皇は「神秘性」や「宗教性」に守られた存在であつて、

自分がそういうものを能動的に発して国を守る存在ではないと思っています。証拠として、陰陽師に身につけた着物を渡して御祓いしてもらうことなどがあげられます。そのように天皇は玉体安穩を祈願してもらう存在です。それ故に天皇の「神秘性説」や「宗教性説」には賛意を表しません。ところが南北朝以後になりますと、足利將軍が京都にいて幕府が武力・政治・経済を握ってしまうわけです。それでなぜ天皇が存続していくかというところ、それは天皇を核とする公家政権である朝廷権力が、権威としての文化とか宗教を握っているからです。現代の例えでいえば、ハードとソフトの関係であって、天皇はソフトの部分の部分を握っているのです。その文化や宗教を掌握している人々が、その偉大さを主張して、権威づけ、その権威でもって自らも力をもったわけです。文化の高い人間はやさしい心であって、荒々しい東夷はいけないのだというのが、やはり一つの文化のあり方があります。

例えば鎌倉初期に平安の説話を編集した『今昔物語集』には、文化の優位性が説かれています。例えば郡司が年貢を押しつけて国司側に渡さないという話があります。それで国司が怒ってその郡司を縛り上げ、「その年貢を出せ」というと、一首の歌を詠みました。そのやさしさに負けて、その国司が郡司の不法押領の罪を許してやったのだという話があります。つまり歌を詠むようなやさしい心、文化を持っているということが、すでに『今昔物語集』では称揚されております。それに対して武力だけの人間は荒々しい夷なのだということが繰り返しいわれます。端的に言えば文化を握っている公卿の勢力の頂点で立っていることが、天皇を守っていったのだと私はいいたいのです。それでそういう文化や宗教（神道・仏教も全部含めて）が、ときには異端となり天皇に抵抗することがあっても、公家権力を支える力となっていたから天皇制が存続したのだと考えるわけです。

またそれだけではありません。鎌倉末から南北朝・室町・戦国時代へかけて商品経済が盛んになってまいります。津々浦々からの商品が京都を中心として畿内にあがってきます。またそれとは逆に例えば伊勢の御師、「オシ」とか

「オンシ」という、宿坊を持っている伊勢の行者がいますが、彼らは山伏やその手下の人たちを派遣しまして、あちこちに伊勢参宮の人たちの積み立てをさせるのです。その積み立てがおもしろいのです。戦国時代の場合ですが、着物一枚とか、刀一つとか、全部積み立てていました。その伊勢の御師の文書を分析した研究があります。それによりますと四国の南端の洲崎ではその土地の四割の人がそれぞれに入っています。「かすみ」という言葉で表現されるような都市や村の宗教的専売区域ができてきます。それは宗派によって必ずしも「かすみ」と表現しませんが、同様の組織です。そういう参詣人のことを「道者」といいますが、その道者の縄張りを「かすみ」として山伏などがつくっています。伊勢だけではなくて熊野の御師も「かすみ」を作り、白山の山伏もそうです。それで地方都市で四割、村で二割ぐらいが組織されています。それが一つの宗派だけでなく、町村には色々の宗派が入っていますから、組織率は相当高いでしょう。戦国時代にはどこも戦争をしているのですが、戦争の中を連れていくのです。敵にも味方にもちゃんと話がつけてあって先達が集団を連れて行っています。日蓮宗で岡山から身延まで参詣して行く旅日記が残っておりまして、それを私は分析したことがあります。

そのように戦国時代には、商品が地方諸国から京へ上り、京から地方諸国へ行きました。それといっしょに文化も普及します。そのような庶民文化の高まりがあり、それにもなつて文化・宗教の政治的な部分をも含んだ宮廷で育まれた文化が地方へ普及してゆきました。実は天皇は戦国時代には生活にも困っていましたが、そのような庶民文化の高まりが、天皇を頂点とした都の文化を全国津々浦々まで普及させてゆき、一種の国民文化を形成したと思えます。「国民文化」は近代史で用いる言葉で、近代国家の形成の元になるものを指すため、ここで使うのは適当ではないかもしれませんが、私は「老若男女、貴賤都鄙が一丸となる文化」という表現で使っております。とにかくそういう共通文化ができたと考えまして、その文化的な普及度の深まりというものが天皇権威を浮上させるのだと思ひ

ます。

それは例えば『源氏物語』が非常に大衆化して、戦国大名が題簽を書いた『源氏物語』の写しを何千疋も出して買ったりしています。お公家さんの困った人はみんなそれを内職にして書いているということがありました。ご存知のように『源氏物語』は光源氏という皇子の出世物語、サクセスストーリーであります。私がこのようなお話を『源氏物語』のすぐれた研究者であった清水好子先生に伝えましたら、「そうです。『源氏物語』が天皇を守っているんです」と賛意を表してくださいました。『源氏物語』の大衆化、これは江戸時代になるとだめなのです。しかし戦国大名は大変大事にしています。三条西実隆という当代の学者が写して、それを天皇に題簽を書いてもらって売っているのです。後でお話する「本願寺の貴族化政策」と関係があるのですけれど、彼は能登の大名、畠山義總に頼まれて『源氏物語細流抄』という注釈書をつくります。それを息子と二人で一生懸命書いて、畠山に渡すのです。しかし畠山は城を攻められて注釈書は焼けてしまいました。そのため、もう一度書いて、それをまた渡すということがありました。ちなみに、長谷川等伯が描いた「武田信玄像」といわれている画像がありますが、それはこのごろは信玄ではなくて能登の畠山だといわれています。

私が日本史を専攻しはじめたころは、中世は武士である領主と農奴という小経営を持った自立した農民との関係の上で中世の世界を作りあげられていたと考えられていました。それはそうなのですが、私が歴史へ入ったのは子どものときから能楽の仕舞や囃子を稽古していきまして、能楽史をやるうと思っただけです。ところが能楽が描いている中世世界は、歴史でやっている中世世界とは全く違うので驚きました。私の思っていた中世世界というのは能楽からのイメージだったのです。それでいろいろ質問して、「そんなのおかしいじゃないの」といつていたら、みんなに怒られましたけれど、それがずうっと尾を引きまして、私は農村史の研究もやりましたが、主に商業史や都市史など、

農村以外のところで中世をやったのです。

それはどう違うかといいますと、例えばは武士の世界を描いた能楽に「藤戸」があることはご存知でしょうか。これは八幡太郎義家などの話と同じような話ですが、備前の国の小島に近江の佐々木盛綱という男が平家を攻めにやってきました。今はもう陸続きになっていますが、あそこは島でした。攻めていって、土地の漁師に聞いたら、船で行かなくても馬で渡せる浅瀬があると云います。考えてみると、佐々木盛綱は近江の国出身だから琵琶湖で船に慣れているはずなのですが、それはともかく、馬で渡り、その結果平家軍をほろぼし、その恩賞に小島をもらうのです。ところが盛綱はその浅瀬を教えた漁師を殺してしまいます。漁師などは下賤のものだから必ずまた他の武将に浅瀬の場所を教えるであろうと漁師を殺してしまうのです。そこで小島を恩賞にもらった盛綱は、そこへ行って得意になって訴訟があつたらなんでも言つてこいといつたら、老婆が出てきてさめざめと泣き、「わが子はあなたに殺された」と訴え、「功績があるのに、殺してしまった。けしからん」というわけです。そこで盛綱は「悪かつた」といってその弔いをするわけです。そこで漁師の亡霊が出てきて、「もう恨みをなして、海の中の悪霊になり、竜になって恨みを晴らすうとしたけれども、お弔いをいただいたから成仏した」といって曲は終わるのです。

このように中世の武士の非道を能楽は語るわけです。戦後には、漁師の亡霊が出てきて浄土宗・浄土真宗・日蓮宗なんかには救われる「三卑賤」と数えられる能楽がもてはやされるのですが、ともかく武士の非道を語る能楽が武士が権力を握っているときに流行します。これはなぜだろうかと懸命に考えたわけです。また不思議なのは、山科の醍醐寺の三宝院の庭に前述の佐々木盛綱に因んだ「藤戸石」があります。それは漁師の血潮で染まったように見える赤い石で、秀吉がたいへんなお金をかけて運んできてわざわざ据えたものです。しかし秀吉も、あまり人を殺さないようにしたといわれていますが、戦争によって天下統一をしたのですから、人を多く殺しています。それが武士の非道を

語る「藤戸石」をわざわざ備えているのはおかしいではないかと思いました。最初はやはり武士に対するモラルを示すためなのかと思ったのですが、私は今は違うと思います。これは文化に押し込められて権力を持たないお公家さんたちの文化が武士の非道を語る曲を作ったのだと。武士ではない人々がそういう曲を作って、文化の優位性を武士に刷り込んだのだと思いますわけです。

たとえば御伽草子や説話集には、「安寿と厨子王」の話を例にあげますと、厨子王は苦勞の末に京都へ行って佐渡の国司になり、盲目になっている母親を救うのですが、室町期の話なのに決して守護にはならないのです。それから例えば、安居院あぐいの『神道集』があります。保元の乱に平氏といっしょになって権力を握り、平治の乱になって殺された信西の息子が安居院澄憲です。彼は比叡山の麓の安居院に住んでいて、唱導僧という説教僧で一番うまい人であります。尼さんの子だといわれて、お公家さんがみな「アマガエル、アマガエル」とはやし立てたというような話が残っている興味深い人です。その末の子孫の時代ですが、安居院の『神道集』はその安居院で作られたお話です。お寺や神社の縁起などが多く含まれています。それはだいたい南北朝期のもですが、あまり守護職などは出てこないのです。みんな国司です。昔の話にするからそうだといわれれば、そうなのですが、能楽でも平家の公達や源義経は出てきますが、頼朝はあまり出てくることがなく、出てきてもほんの端役です。それは、悲劇の方がおもしろいということがありますが、寺社の縁起を作っている人たちは僧侶であつたり、公卿のアルバイトであつたりするので、その人たちが、自分の世界の中で話を作ったのではないかと私は考えているわけです。

そうすると能楽はどうでしょうか。今の能楽の原型ができるのは鎌倉中末期ぐらいですが、それが南北朝の末期あたりに観阿弥が出て、そして室町初期に子どもの世阿弥が出て、観阿弥・世阿弥父子によって集大成されたものが今の能楽の基本になっております。そうしたら観阿弥が室町幕府の足利義満將軍にご覧に供して、それを義満が認め、

また十二歳だったのちの世阿弥を寵童にしました。それをはじまりとして能楽は御用の式楽となりました。幕府の式楽といわれますのはもっと後のことですが、とにかく將軍愛顧の地位を獲得しました。それが「大和四座」でありましたので、大和猿楽が観世を筆頭として独自の地位を築きました。猿楽は全国津々浦々にあつたのですが、うまい人は皆「大和四座」に吸収されて、それが中心になりますから、後の徳川時代になってできた喜多流を入れて五流しかないわけです。各地にありますし、大和猿楽より以前に丹波猿楽など、他の猿楽が多く隆盛だったのです。しかし大和猿楽が將軍の愛顧を得て幕府の式楽といわれるようになって、能楽は隆盛になってゆくのです。金春大夫が観阿弥のおかげだということで、観阿弥の命日には僧二人に供養させるほど隆盛になるわけです。

このように能は盛んになるわけですが、能は当然幕府の武士中心の文化を作るはずでしょう。しかし全然そうではなくて能に出てくるのは日本古来の神々（古来といってもそのときにきた神がいつばいあるのですが）であり、公家です。能では『平家物語』に登場する武士以外で出てくる侍はほとんどいません。世阿弥は、二条良基などの公卿に歌の道を習ったため公家文化に強く影響されています。それが不思議です。

今では一部のインテリしか習わず、大衆化してはいませんが、観阿弥の時代、能楽は全国津々浦々の村々町々での神社の祭礼に必ず行われていました。例えば関西空港の敷地になった和泉の日根野庄のことを書いた古記録によりますと、秋に専門家を頼んで神様に捧げる能が行われています。当時猿楽師というのは、声聞師しやうもんじといわれる被差別民の専門家・芸人です。ところが夏の雨乞いとかに、村の人たちが練習してそれをやるのです。最初は教えてもらうのでしょけれど、素人の能と専門家の能と春・秋二本立てで行われます。当時中世で一番盛んだった芸能は能楽ですが、各地に能楽の専門集団がいて巡業回りをする縄張り・テリトリーをもっていました。観阿弥は、そのような場所で神様の祭礼に舞うのです。ご存知のような『翁』という能があります。あれをやりまして、その次にその



神様が示現するような能をやるわけです。観阿弥も地域の神々が民衆の生活を守るために示現する能を作っています。『淡路』という能が残っています。それは淡路国の二宮に関するものであります。なぜ二宮というかと、国司が巡拝する順序を意味するもので、院政期から鎌倉期にかけて一番、二番、三番と決められるのです。だからその国の神々の等級をつけたのです。淡路国で二宮になった神が二番目というのが悔しかったからでしょうか、二宮を祭る村の人々が観阿弥に頼んで『淡路』という曲を作ってもらいました。そこでは、イザナギ・イザナミの二人の神を祭っているから「二宮」で、二番目の神だからではないと、神社の由来を謡っています。現在だったらお隣の町が立派な市町村史を作ったから、この村は「もっと立派なものを作ろう」といった感じで、各神社が能を作りました。

それから神社の縁起を三条西実隆のような学者に書いてもらって、絵巻を作ります。それは何かといいますと、当時、各地域の村や町の共同体が自治組織を作っているためです。戦乱の世の中から、防衛のために自治組織を作ります。畿内の村々は、とりわけ強い連帯の自治組織を作っております。中世の日本はわりと自治が強いのです。そういう共同体がお公家さんや観阿弥などに頼んで神様の縁起を作ってもらうのです。それは神様を中核・紐帯にしてそういう自治共同体を作っているためです。私の家の近所で「皆法華」といまして、日蓮宗が初めて西国にきたとき、村中が日蓮宗に帰依したところがありますが、当時鎮守の神様を七つの郷村が集って祭礼をしていました。しかし日蓮宗になった村が抜けました。その抜けた役はそのままにして今では六つの郷村でお祭をやっております。このように村が一丸となって、その村の政治もすべて仕切っています。そういうところが観阿弥などに頼んで村の鎮守神の神徳が盛んであることを示す能や縁起を作ってもらうのです。

依頼していることを示す例は少ないですが、琵琶湖に白鬚神社という神社があり、そこでは、天正年代に狂言を作っています。具体的にいうと白鬚の神の造替の勧進に応じて寄付をしない人間は琵琶湖を通さないと狂言を

作っております。今も都市ではイベントを開催してお祭りをやるがありますが、そういうことはやはり中世にもあるわけです。観阿弥もそういう村々などに頼まれて能を作りました。そして村人たちはその神々に何を頼むのかというと、その望みはやはり生活を守ってもらうことを頼むのです。漁師だったら大漁祈願をするとか、非常に現実的な形で生活を守ってもらうことを神様に願うのだとはつきりいつているわけです。そういう願いに応えて神が示現してきて、舞を舞うという猿楽を演じるのであります。

ところが世阿弥になってきますと、世阿弥は義満のもとで育っていきますから、公卿文化に大きく影響されてゆきます。世阿弥の能楽は文章がきれいで、舞は舞いやすいのです。さらに世阿弥の能に出てくる神様は非常に抽象的なものです。天下国家の平和がもたらされると結果的には民衆の生活を守られるという話になっていて、天下国家とか天皇の玉体を守る神が示現いたします。これはなんだか近代の民権論と国権論によく似ていて、観阿弥は村の民の生活を守るためには、そこを戦場にしてはならないと考えますが、逆に世阿弥は突き詰めれば天下国家の平和があれば民の生活は守られるという理屈になります。

例えば『弓八幡』という曲がありますが、これは、中国古代では桑の弓と蓬の矢を袋に入れる——つまり武器を袋に入れて——それを出さなくていい御代の到来を寿ぐという故事をふまえています。平和が到来して武器をどこかへしまってしまうという事を示しています。この能は、八幡社の末社の神である高良の神が出てきて袋に入れられた弓矢を勅使に捧げます。そこにあるのは「天皇—勅使—八幡社」という構図であって、將軍が出てきません。これもおかしいと思ったのですが、將軍の御用能楽師である世阿弥が『弓八幡』が「自分の神能では一番素直でいい」といつているのです。ところがよく考えると、やはり弓矢を袋に入れることができたのは武力のおかげなのです。武力で天下統一をしたのは足利將軍です。だから武威で保たれた天皇の治世を神が寿ぐという構図であります。そのため天皇

は將軍の上に位置しているのです。このような構図を能楽という文化的芸能において達成して、將軍・天皇の存在意義を作っているのです。それが天下泰平という時代とか、商品流通とか、村の力の向上などで、能楽は全国津々浦々へゆきわたり、このピラミッドの構図は全国に刷り込まれていったということは、やはり足利將軍・天皇の権威を保つていく元になると思われます。

それで能楽はそのぐらいにしまして次に連歌ですが、能楽も連歌も琵琶法師も何もかもがそういう構図を持っているということです。連歌は当時大変流行しました。なぜかというところ、茶でも連歌でも中世ではすべて賭けなのです。ギャンブルです。「鬮茶」では、みな賭けものを持ってきて、一番から順番にやって、そして商品を取るのです。連歌も賭けで流行します。『建武式目』という幕府の式目に「莫大な賭けはいけない」と書いてあります。有名な『二条河原の落書』に「在々所々の歌連歌、点者にならぬ人ぞなき」とみんな天狗でお師匠株であるというような話になっています。「箕被<sup>みかづき</sup>」という狂言は、箕を被くというのと三日月をかけてあるのですが、賭け麻雀みたいなもので連歌を夜通しして帰らない夫と夫婦喧嘩した妻が「それなら暇をください」と家出します。では「離婚しよう」と男も怒ったら、離婚するときにはその家の中で一番いいものをもらっていくのですけれど、ここは何もないから箕を頭へ被いて実家に帰ろうとします。そうしたら夫は「いまだ見ぬ二十日の宵の三日月は、」と読みかけます。箕を被くというのと三日月をかけているのです。そしたら妻はそれに返歌をしなかったら「次の世は口のない虫に生まるる」といわれているといって、「今宵ぞいづる身こそつられ、」と返しますと、夫が喜んで、「そういうふうに応じてくれたら離婚などといわないのだ」といい、「仲良くしよう」とめでたしめでたしになるのです。

また奈良で土一揆を起こした馬借が捕まって殺されるのですが、そのときに連歌を詠むのです。茶六という男といっしょに死ぬので、茶六と道連れだから自分に茶などを手向けてもらわなくていい、というような連歌を詠んだそ

うです。それほど連歌は流行するわけです。それは例えば宗祇という人が『新撰菟玖波集』を作って、結局連歌師の頂点に立つのですが、これは結局どういうことかといえますと、当時戦場では長々待機することが多く退屈なのです。だから陣の中では碁を打ったり、将棋を打ったり、連歌をやったりするわけです。そういうところへ宗祇のような連歌師が行って、ついでに敵方のところへも行くのです。つまり彼らは敵味方なく通行できる身分ということです。それで連歌師が和平交渉なんかをよくやつて行くのです。宗祇の弟子の宗長という人は、今川の家来で和平交渉に走り回っています。宗祇は諸国の大名のところへ行くのですが、パトロンの大内氏が發議して、つまりお金を出して、

『新撰菟玖波集』を朝廷の准勅撰集として出すのです。そして編者として三条西実隆と一条冬良が天皇家との仲立ちをします。それで連歌師がその『菟玖波集』を作るわけです。ただおもしろいのは、天皇が編者を任命したら、建て前としては「これ入れろ、あれ入れろ」といわないのです。日野富子の自作の連歌を「これも入れてやってくれ」と天皇が頼んでいます。大内が發議しますから、大内政弘が七十五句、四国阿波の細川成之が十五句、宗祇が六十二句と、やっぱりパトロンの連歌をたくさん入れていきます。結構これは評判が悪くて、「あしなくて上りかねたる筑波山」と野次られます。「あしなくて」の「あし」はお金のことです。それと足がないから山へ登れないというのをかけてあって、ここがやっぱり連歌らしいところであります。

そういうかたちで結局連歌は津々浦々に流行し、最初は和歌に対して連歌というものは卑俗なものだと思われていたのが、二条良基以来わりと格式を持つようになりました。そういうものをやはり准勅撰にしてそのピラミッドを築いて、宗祇が天皇・公卿集団というハイソサエティーと地方の大名や賭け連歌をやっている大勢の村人たちとを、ピラミッドに編成していくのだからというのが私の言いたいところでもあります。

『源氏物語』も非常にこの時期流行して、先ほどいいましたように戦国大名はそれを写してもらってお宝にしてい

ます。江戸時代には、「あんなもん軟弱でダメ」ということになって、花魁のところにおいてあつて遊廓へ行かないと読めないという話がありますが、戦国大名のあいだでは大変流行するわけです。宗祇が三条西実隆に説いて三条西実隆が研究会なんかを催しております。そこでは、「この物語はこのごろいっこうに流行しない。しかしおもしろい」というようなことをいっているのですが、それは宗祇がそういって三条西実隆と語らつてはやらしているわけです。私が思うに『源氏物語』は、後ろ盾も財産もない皇子が身一つで出世街道を上がつていく、そのサクセスストーリーが非常に受けたのです。要するに源氏が太政大臣になったり、上皇なみになるのは、姦通の結果できた子どもが帝位にあがるからです。戦国大名は領域侵犯が仕事ですから、姦通の結果であるというのは「国盗り物語」の好色版であつておもしろかつたのではないかと思うのです。そして戦国大名のすごろくみたいなあがりというものは上京することですから、やはり宮廷儀礼が必要です。戦国大名というのはみんな京へ上つて天下に号令したいと思つています。そうするとやはり『源氏物語』は宮廷を舞台にした好色と政治性をもち、それから京に上がったときのいろいろな儀礼もわかります。宮廷で征夷大將軍に任命してもらうのがすごろくのあがりでしょう。それがよくわかるということもおもしろかつたのではないかと私は思うわけです。

大内氏を始め全国の大名たちは、「官途」といわれている官位をすごく欲しがります。大内は、三条西実隆の許へ行き、絶えずそれを「上にいうてくれ。いうてくれ」とねだり、実隆は「身分を知らない」とかいつて怒るわけです。戦争の時「〇〇の守」などと名のるあの官途もどうやって名乗るのだろうと思つていたのですが、あれは明らかに戦国時代には大名が出すようです。それは本来は朝廷へ願つて、朝廷から出してもらうものですが、何らかのお金を出すのです。たいしたものではないのですが、取次ぎの人がみなりペーントを取つていきますから、天皇へあがるのはたいたお金ではないのですけれども、その元はどれだけ出しているかわかりません。記録に残っているのは、天皇が

「お札が少ない」と書いてある分だけなのです。鎌倉幕府や足利幕府が強いときには、それを統制します。また徳川幕府のときは厳しく統制しますから別途では出ないのですけれど、徳川幕府以外は、別途に申請することはやはり出来ずから、権力の核がどうしても天皇と幕府という二つになってしまいます。それがやはり大きいのだと思います。

最後に「本願寺の貴族化政策」という話をして終わりだと思いますが、蓮如上人以降たくさん子どもさんがありますが、先ほどの三条西実隆などの公卿集団と多く婚姻を結びます。その血縁を利用して本願寺は貴族化政策を進めます。これは私は当時の戦争の中では止むを得ないと思いますが、どうも一向一揆が持っている武力と、宗門教学と、貴族化政策が別個に研究されていて、その連関性がつかまえていないと思うのです。時間がありませんので簡単にいいいますと、三条西実隆の孫の九条種通や、甥である尊鎮法親王などが本願寺が勅許を得て門跡寺院になるのに力を貸して活躍しますし、お公家さんたちが婚姻関係を結び親戚になっています。かれらを媒介として、天皇・公卿の文化財が本願寺に入り、今も所蔵されています。

結局それでどういう効果があったかというと、大坂本願寺と寺内町の話をしなければなりません。大坂本願寺の寺内町というのはその本願寺の膝下の都市です。本願寺を囲んでできる都市は軍隊の進入を防ぐためみんな「不入権」を持たなければなりません。中世の莊園とか莊園領主の住んでいるところは「不入権」という軍隊が入らない権利を持っているわけです。それから「不輸・不入権」といまして年貢も出さなくていい権利を持っています。簡単にいいますと、そういう「不輸・不入権」を得て「自治権」を獲得するのです。これは大坂本願寺の場合、本願寺の門主がその権利を握るのです。だから本願寺の自治であって、都市民の自治ではないということがあるのですが、とにかく、他の寺内町も結局は「大坂並特権」を全部もっていますから、そういう自治都市になっていくのです。中世にはいくつかあって、これは信長・秀吉・徳川によって破棄されます。だから必死に一向一揆を起こすのですが、本

願寺はどうしたかというところ「貴族化政策」によって公卿や皇族の勢力を味方につけ、荘園領主並みの特権を獲得するわけですね。そこにはやはり一向一揆の武力とか、宗門教学の論理とかが、非常に力を持っていますけれど、それらが「貴族化政策」と相応して寺内町の自治化を果したわけですね。そのため「貴族化政策」のその時代における現実的な意義を評価しなければならぬと思います。

さらにいろいろお話しようと思っておりましたけれども、時間も超過しましたので、これで終わらせていただきます。どうも、ご静聴ありがとうございました。